

---

# 嘘つきオオカミさん

laziness

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘つきオオカミさん

### 【Nコード】

N5668M

### 【作者名】

l a z z i n e s s

### 【あらすじ】

ある病と闘う少女と、「オオカミさん」と呼ばれる医者のお話。

私のお医者様せんせいはオオカミさんという人です。  
名字が『大神』おおかみだからオオカミさんというのであって、童話に出てくる赤ずきんちゃんを食べちゃう様な怖いオオカミさんじゃありません。

オオカミさんは黒縁メガネに白衣を着て、いつも首から聴診器をぶら下げています。他の人からは「大神先生」と呼ばれていますが、私としては「オオカミさん」の方が可愛いのでオオカミさんで通します。

で、そのオオカミさんなのですが。

私とオオカミさんが初めて会ったのは、私が七つの時です。

冬の寒い日の事で、家で大人しく遊んでいたら突然目の前が真っ暗になって、気がついたら見知らぬ大きな男の人　当時の私は同年代で比べても随分と小柄で、そりや子供から見れば大人の男性は大抵大きく見えるのですがそれでもオオカミさんの大きさはずば抜けていて　　が目の前にいました。

お母さんもお父さんも涙をぽろぽろと子供の様に流していました。私にはいつも泣いちゃいけません、と言って叱るのにずるいです。

そう言ってむくれたら、オオカミさんは私の頭をぽんぽんと軽く撫でて言いました。

今日からここが君のお家だよ、と。

それはおかしいです。

本当の私の家はこんなに真っ白じゃないし、本当の私の部屋にはベツドがありません。それに花だって飾ってないし、窓もあんなに大きくありません。

そう言ったら、オオカミさんは困った様に笑いました。

君はここに引越してきたんだ。だから君も、君のクマさんもここにお引越し。

そう言つてオオカミさんは、私のお気に入りクマさんをひょいと差し出してくれました。

私がそれを抱きしめると、オオカミさんはふわぁと柔らかい顔をしました。

けれど暫くしたら、お母さんとお父さんと一緒に部屋を出てしまいました。

一人ぼつちは嫌でしたが、クマさんがいたのでへっちゃらでした。

そうしたらまたオオカミさんは戻ってきました。

今度はお母さんとお父さんはいません。

お母さん達は？

私が尋ねると、オオカミさんはまた私の頭を撫でました。

お母さん達はお引越しのお手伝いに行ったよ。もう遅いから、君も

寝なさい。

そう言つて、オオカミさんは私に布団をかけてくれました。  
なぜだか凄く疲れていたのも、私はそのままぐっすりと眠ってしま  
いました。

その日から、私は一人で歩く事が出来なくなつてしまいました。

起きる時もオオカミさんに起こしてもらつて（ご飯は一人でちゃん  
と食べます。ピーマンとニンジンが嫌でしたがオオカミさんは食べ  
なさいというので仕方なく食べるフリをしました）、『くるまいす』  
というものに乗つてオオカミさんにあちこち案内してもらつたり（  
おトイレの時は他の女の人が手伝つてくれました。オオカミさんは  
サボっているのでしょうか？）、寝る時はオオカミさんが私が寝る  
まで傍にいてくれたので寂しくありませんでした（たまにオオカミ  
さんも私の部屋で寝てしまう時があるのですが、疲れているみたい  
だったのでそのままにしておきました）。

お母さんとお父さんは毎日会いに来てくれます。  
けれど何だか寂しそうで、泣いてしまいそうに辛そうな顔をしてい  
ます。

そんな顔で会いに来て嬉しくありません。

そう言つたら、オオカミさんはムツとなりました。

そういう事を言つてはいけません。二人とも忙しいのに毎日会つて  
くれるんだから、「ありがとう」って言わなきゃ駄目でしょう？

そう、オオカミさんは怒りました。  
何で怒ったのか、私はよく分かりませんでした。

オオカミさん、オオカミさん。

少女はそう言って、私の冷たい手を取る。  
彼女の小さな手越しに、その温かさが伝わる。

どうしたの？

そう聞くと、彼女は一枚の色紙と鉛筆を取りだした。

七夕のお願い、オオカミさんは何をお願いするの？

その無垢な笑顔に、無邪気な言葉に。  
私の心臓が音を立てて軋んだ。

ギリギリと締めあげられる様な錯覚に陥りながらも、私は長年培ってきた『上辺だけの笑み』を湛えた。

そついう君は、もう何をお願いするか決めたの？

あのね、あのね！

言って、彼女は身を乗り出さんばかりに笑う。

私、今度のお誕生日会にオオカミさんが作ったケーキが食べたい！  
看護師の一人が洩らしたのだろう、私が菓子作りが出来るという情報を得た彼女はもうお願いというよりおねだりに近いそれを満面の笑みと共に放つ。

オオカミさんの作ったケーキは凄くおいしってみんな言ってたのに、私はまだ食べた事無いから食べたいの！

言って、彼女はお気に入りのティベアを抱き締めた。  
酷く無垢で無邪気なそれは、けれど、私にとってはあまりにも残酷な言葉だった。

ねえ、オオカミさん！

そう言って笑う彼女は、まるで外の蝉の様に喧しい。  
けれど風鈴の様に澄んだ声音で私を呼ぶその声は、何故か愛おしく思えた。

だから私は笑う。

いいよ、と。

たくさん食べさせてあげるよ、と。

そう言えば、彼女は向日葵の様に鮮やかな笑みを浮かべるのだ。

だから私はオオカミ（しんじつ）を隠す為におばあさん（うそ）の

毛皮を被る。

毛皮を被って静かにその牙を研ぎ澄まし、じっと待ちかまえる事しか出来ない。

夏の終わりと共に訪れるであろう最期の刻を迎える為に。

赤ずきんちゃんが食べられる（しぬ）その瞬間を静かに待ちかまえる。

嗚呼、だからそんな笑顔を向けないで。

私はオオカミさん（うそつき）なのだから。赤ずきんちゃん（きみ）を食べてしまう（みごろす）悪者なのだから。

物語で、赤ずきんちゃんはオオカミに食べられてしまう。

その瞬間に、彼女は何を思ったのだろうか？

きつと絶望しただろう。

きつと憤慨しただろう。

嘘つきのオオカミは自分の腹を満たす為に赤ずきんちゃんを食べた。

なら私は？

彼女を見殺しにしてしまうだろう私に、彼女は果たしてどんな顔を向けるだろう？どんな感情を抱くだろう？

きつと絶望するだろう。

きつと憤慨するだろう。

嘘つきのオオカミさん（わたし）は自分を守る為に赤ずきんちゃん（かのじょ）を食べる（みごろす）。



だから私は毛皮を被る。

やがて訪れるその時まで、彼女をたつぷりと肥やしていく。  
その時が訪れた時、そこに心残りがないように。

外で鳴く蝉の音が、一つ、消えた。

## （後書き）

一時期は連載も考えた（けど話が続かなかった）没案を纏めてみました。

仮に連載になっていても三丁五話程度の中編程度にしかありませんが。

何か感想があればバシバシどうぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5668m/>

---

嘘つきオオカミさん

2010年10月28日03時10分発行